

彼は至高の真理です

かつて、シヴァラートリの数日前に、シュリ カルンニャーナダはプッタパルティに向けて出発した。彼はラージャムンドリーのセンターに5台の車を所有していたが、料理人を連れてバスで旅に出た。チットールを過ぎてしばらくすると、そのバスは故障した。乗客は全員バスを降りて待つように言われた。バスが修理を終えるまで、かなり長い時間がかかり、カルンニャーナダは動揺した。彼は何人かの乗客に話しかけ、シュリ サティヤ サイ ババがあんな辺鄙な場所に住もうと考えたから、みんながトラブルに巻き込まれるのだ！ なぜババはだれでも簡単に近づける、もっと町の中心地を選ばなかったのだろう、と嘆いた。

遂にそのバスは修理を終え、ブッカパトナムを経て、プラシャーンティ・ニラヤムに到着した。シュリ カルンニャーナダは沐浴をし、服を着替えてからスワミに会いに行った。その時、スワミは数人の学者や他の人々と一緒にいた。スワミがカルンニャーナダに尋ねた最初の質問はこうだった。

「カルンニャーナダ！ あなたは何台の車を持っていますか？」

カルンニャーナダは、取るに足りない世俗の所有物に関するババの質問に、大いに当惑した。しかし、他の人々が答えるよう促すので、彼は答えた。

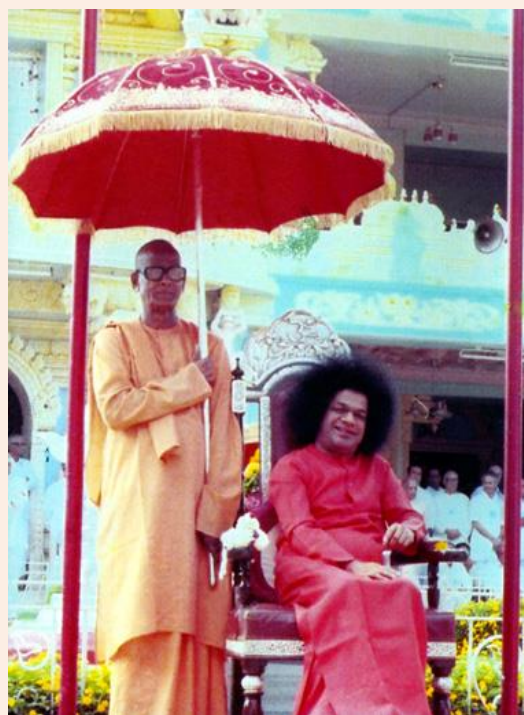
「ジープとバンの他に、車を1台持っています」。スワミは尋ねた。

「それなら、バスで旅をする必要がどこにありますか？ なぜそんなことをして、スワミが辺鄙な場所に住んでいると他人に小言を言い、しかもそれを不愉快に思うのですか？」

シュリ カルンニャーナダは啞然とした。

「一体、だれがスワミにしゃべったんだ？… だれもしゃべっていない！…私はだれにも話していないのだから！ これは、プッタパルティに座っているながらスワミが何マイルも離れた場所で起こっていることを知っているということだ！」

1965年、シュリ カルンニャーナダは「電流が走るような身震い」をもたらす「スリルに満ちた体験」をした。彼はスワミに随行して、ボンベイ（現在のムンバイ）へ行った。ダルマクシェートラ（ボンベイのアシュラム）でスワミは二階に上がり、カルンニャーナダは階下の部屋にいた。午前11時頃、大勢の信者たちがスワミに会うために二階に上がっていった。そこで、シュリ カルンニャーナダは内側から部屋のかんぬきを掛け、スワミに会う人々の上り下りが見える小窓のような開口部のそばに座っていた。うまくかんぬきを掛けていたので、カルンニャーナダからは人々が見えたが、彼自身は人々の目から見えなかった。



カルンニャーナダとバガヴァン パバ

しばらくすると、カルンニャーナダは背中全体にくすぐったい感覚をおぼえた。ギクッとして振り向いたとき、カルンニャーナダは自分の目を疑った！ というのは、そこには、唇に微笑を浮べたバガヴァン パバが立っていたからだ！

「この遊戯は何ですか？ あなたはクリシュナのリーラー（遊戯）の時代に逆戻りなさっているのですか？」と、シュリ カルンニャーナダは尋ねた。

スワミは無邪気に答えた。

「何ですって！ 私はただ、あなたを昼食に呼ぶために来ただけですよ！」

シュリ カルンニャーナダは立ち上がり、ドアの近くに行った。かんぬきはしっかりと掛けられていた！ スワミを部屋の中に入れる者は、他に誰もいなかった！ 自分を抑えることが出来ず、カルンニャーナダは叫んだ。

「スワミ！ あなたはどうやって中に入って来られたのですか？ 私はこの部屋の唯一のドアにかんぬきを掛けていたのです！」 スワミは尋ねた。

「私が入りたいと思えば、かんぬきが妨げになり得ますか？」

その途方もない啓示に、シュリ カルンニャーナダの体は震えた。彼が震えているとスワミは近づいて来て、カルンニャーナダをポンと軽く叩いた。その瞬間、カルンニャーナダは偉大な啓示のすべてを忘れ、普通の状態に戻り、スワミと連れ立って昼食を取りに行った。

「おわかりでしょうか！ これもスワミがなされたのです！ 分厚い、しっかり閉まったドアを通して、（アリ 1 匹さえ入れなかった）部屋に、スワミが肉体をもって現れたことは、私にとって神経が震えるほどの衝撃でしたが、スワミは私を軽くポンと叩いて、通常の状態に戻されたのです！」と、スワミ カルンニャーナダは言った。

「それがバガヴァン ババなのです！ …ババの力はそれほど途方もないもので、ババの意志はそれほど強力で…ババは普通の人間や超人ではありません。ババは至高の真理です…しかし、ババはそのほんの一片すら見せないのです！ ババはわざと、一切をマーヤー（迷妄）のヴェールで覆っているのです！」

スワミ カルンニャーナダはそう説明した。

V.バルー著『プッタパルティの栄光』より抜粋

出典：月刊『サナータナ・サーラティ』2014年10月号